

てゐる。その個々の論文に就いての紹介は限られた紙幅のよくするところでないが、著者がそれら諸篇を通じて明かにしたところは東山文化の基底に存する公家文化、具體的には平安朝の古典文學、天台、華嚴等の舊佛教、就中淨土教の傳統の強さ、大ききであつて、從來の常識が動もすれば卑に宋元文化、就中五山によつて代表される禪風文化の浸潤によつて成立せるものとする皮相なる見解を是正してゐる。而してそれはやがてまたこの尠大なる互冊全篇を通じての主導者でもある。確にかゝる基底に存する文化精神の永き傳統を明かにしてのみ、東山文化がわが國文化史全體の上に占める位置を正しく標示することが出来る。然もかくの如き傳統の中心にわが皇室のあらせられることは、敗戦後の今日特に感慨深く讀まれるところである。

(昭和二十年十二月東京河出書房發行、定價六八圓) (柴田)

遼金時代の建築と其佛像

竹島 卓一著

わが國における滿蒙研究の發達を顧みると、二つの大きな躍進期がある。一つは明治三十八年頃より四十年代にかけてであり、この期にあつては、歴史及び地理に關する研究が主軸をなしてゐる。他は昭和七年以降現在に至るもので、社會・經濟・文化・考古學方面の活躍があげられる。ここに紹介する「遼金時代の建築と其佛像」は、それらのうちにあつても、特にすぐれた業績の一といへよう。

著者竹島氏は、嘗て東方文化學院東京研究所に籍を置き、昭和

六年以來關野貞博士とともに、幾度か北支・滿洲・蒙疆地方に支那古建築探査の旅をつづけられたときが、中でも遼金時代の建築に關する業績は特筆に値すべく、たとへば薊縣獨樂寺において、觀音閣・山門など遼代の建築を發見し、また大同上・下華嚴寺の諸建築物を遼代及び金代のものとして推斷したことなどは、特にいちぢるしいものである。

さて本書は、さきに昭和九・十年にわたり同じ題名を附して東方文化學院東京研究所より刊行された上下二冊の圖判の解説であるが、なほ前半に四十三葉の木造建物・佛像・塔・經幢・碑石・銅鐵鐘などの寫眞と二頁大の地圖とを添附し、本文は第一編木造建築と其佛像、第二編塔石造建築と其佛像附鐘とに分れ、前者はさらに第一章薊縣獨樂寺の觀音閣と山門、第二章義縣奉國寺の大雄殿、第三章大同下華嚴寺の薄伽教藏と海會殿、第四章大同上華嚴寺の大雄寶殿、第五章大同普恩寺(善化寺)の建築と佛像の五章より成る。各章とも、まづ伽藍の配置及びそれに關する諸記録を紹介したのち、その構造様式上より年代を推定してゐるが、その方法はあくまで科學的立場をとつてゐる。大同上華嚴寺大雄寶殿を構造様式上より遼代と推斷して記録の不備を正したこと。大同普恩寺の大雄寶殿を遼の興宗道宗時代の遺構とみたこと。同じく三聖殿・天王殿の遺構より金代建築の様式を究明してゐる點などは、その顯著な例といへよう。

第二篇は二十一章より成り、うち十九章までには林東・白塔子・大名城をはじめとする北支・滿洲各地の遼金時代の塔を、また

第二十章には七基の石幢、第二十一章には石碑及び銅鐘を述べてゐるが、第十六章房山雲居寺の塔以下は關野博士の遺記録がそのまま掲げられ、すこぶる簡略にして、いささか讀者にもの足りなさを懐かしめることは惜しい。第二篇も塔の年代推定には前篇の木造建築と同様科學的方法を採り、いよいよ詳細な建築學的考察を加へて、その建立の年次を決定してゐる。そのために、たとへば朝陽の南塔北塔の如く、從來ただ外形上漠然唐代あるひは遼代と稱せられてゐたものが、本書によつて北塔は唐代の創建に遼初の増修が加へられ、南塔は遼代に成つたものとの詳しい説明が與へられ、また北鎮崇興寺の東西雙塔のうち、西塔が年代的に先行し、且つ手法においても東塔より優れてゐることなどの如きは、一般に正しい知見を與へるものである。その他、朝陽風凰山の三塔、五家子の塔塔(六角九葺)、黃花堂・塔子山の塔塔などは本書をまつて始めて詳細に紹介されたものといへよう。要するに、本書によつて遼の様式を通じてではあるが、あいまのうちに閉されてゐた唐代建築の様式が著るしく鮮明されるに至つたこと。從來遼金と漠然並び稱せられてゐた建築及び塔が、造式と金式との間に、あきらかな様式上の差異を有すること。さらに宋と遼との間にも構造様式上かなりの相違が存し、遼は宋の様式をうけたものでなく、直接唐につながるものであることなどが具體的に確認されたわけであり、この點ひとり支那建築史の上のみでなく、ひろく東洋文化史研究上にも貢獻するところ大なるものがある。しかし、最後に望蜀の言を容るされるなら

ば、本書に用ゐられてゐる建築上の術語に、いさ少し平易な言葉が置かへられてほしい次第である。(昭和十九年一月龍文書局刊、四六倍判三四五頁、岡判四三葉、地圖一葉、賣價一四圓六〇錢)〔田村實造〕

彙報

國史研究室談話會

國史研究談話會は年初以來次の如く開かれた。

一月卅日

仁齋學研究の方法

石田 一良氏

二月六日

高麗版大藏經

東伏見邦英氏

二月廿七日

座に關する一史料

赤松 俊秀氏

堀内他次郎副手 昭和二十一年二月十七日逝去

君は茶道表千家流堀内家に生れ(大正三・十・三)、京都一中・三高文甲を経て本學文學部史學科に入り(昭和十年)、國史を專攻して昭和十三年三月學士試験に合格、爾來大學院に在籍して西田・那波兩教授指導の下に「日本文化ト茶道」の研究に専念、その間昭和十八年五月以來副手として國史研究室の經營に盡力されてゐた。